慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バシレウスの末裔 : アレクサンドロス大王と秦の始皇帝
Sub Title	Descendants of basileus basileon : Alexander the great and the first Qin emperor
Author	森, 雅子(Mori, Masako)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.2/3 (2022. 5) ,p.97 (227)- 118 (248)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220500-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バシレウスの末裔
――アレクサンドロス大王と秦の始皇帝――

森　雅子

（一）

アレクサンドロス三世、後に大王とも呼ばれる英雄がマケドニアの首都ペラで誕生したのは前三五六年のことである。当時、マケドニアはギリシアの諸都市国家からは後進地帯、野蛮な外国人（バルバロイ）の国として蔑まれていたが、一時的にではあれテーベの人質であったフィリッポス二世を父、マケドニアの西隣りの国エペイロスの王女オリュンピアスを母として生まれた彼は、この王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者アリストテレスらを教師として厳しい英才教育を受けて成長した。前三三八年、彼は「カイロネイアの会戦」で目覚しい活躍をし、やがて父が暗殺されると二十歳にして王位に就いた。以後、彼は父の悲願であったペルシア帝国、ついでより広い世界の征服を目指してヨーロッパとアジアの分岐線であるヘレスポントスの海峡を渡り、その短い生涯の間に遠征と戦闘を繰り広げて広大な帝国を樹立し、まさしくバシレウス（諸王の王）という称号に最も相応しい人物としての足跡を歴史上に残した。[1] 以下に、彼の即位後の生涯を略述する。[2]

前三三六年、マケドニア人の民会で、アンティパトロス（フィリッポスの外交面における片腕であった高官）やパルメニオン（フィリッポスの軍事面における最高責任者）らの支持を受けて正式に推挙され、選出されて王位に就いた彼は、まずギリシアの諸都市をコリントスに召集し、彼らに二年前にフィリッポスに誓約した内容、すなわちマケドニアの覇権を承認させた。ついで彼はマケドニアの北辺を脅かしていた北方蛮族を制圧するため

に遠征したが、この間に彼が戦闘中に死んだという誤報で蜂起したテーベを取って返して滅ぼし、後顧の憂いを除いてペルシアの征服という大事業に着手する。

前三三四年、後事をアンティパトロスに委ねた彼はペラを発ち、アジアに上陸してペルシア王ダリウス三世が派遣した軍団と対峙した。このペルシアとの第一戦「グラニコスの会戦」で勝利を収めた彼は、ついで小アジアの西海岸に進軍し、それまでペルシアの支配下にあったイオニア地方のギリシア諸都市を開放した。

前三三三年、小アジア内部を制圧した彼はペルシアとの第二戦「イッソスの会戦」に臨み、ここで初めてダレイオス三世と直接対決したが、この戦いにおいても圧倒的大軍を誇る相手を打ち負かした。ついで彼は地中海の東岸に連なるシドン、テュロス、ガザなどの海港都市を制圧しつつ南下し、重傷を負いつつも前三三二年当時ペルシアの支配下にあったエジプトに到着した。解放者として迎え入れられたこの地に半年間滞在した彼は、その間に後に彼の霊廟となるアレクサンドリアの建設工事に着手、またエジプトの古来の神々への表敬訪問を行い、とりわけ襲い掛かる水不足や砂嵐といった困難をものともせず砂漠の中にある神アンモンの神殿に参拝したことは名高い。

前三三一年にエジプトを出発した彼とその軍団は、ペルシア王との再度の対決のためにメソポタミアを目指して北上し、ユーフラテス河を渡り、ティグリス河の近郊の村に辿り着く。この「ガウガメラの会戦」では、ダレイオスはペルシア全土に総動員をかけ、万全の準備を整えて広大な平原に布陣していたが、アレクサンドロスはその僅か五分の一の軍勢でこれを打ち破り、敗走せしめた。大勝利を収めた彼は、その勢いにのってペルシア帝国の象徴ともいうべき古都バビロン、スーサ、ペルセポリスを陥落させ、夏の離宮であったエクバタナを前線基地としてパルメニオンに委ねた後、逃亡を続けるダレイオスの追撃行に出発した。しかし翌年、後者はバクトリア太守ベッソスら部下に裏切られ暗殺されてしまったので、その死により建国以来繁栄を誇った世界帝国アケメネス朝ペルシア（前五五〇～前三三〇年）は完全に滅び、この段階でアレクサンドロスが「大王」―ギリシア・エジプト・ペルシアを統べるバシレウスとなった。なお、この前三三〇年秋以降、彼がアケメネス王家の宮廷儀礼を採用し始めたことに対する批判がマケドニア将校たちの間に生まれ、まず大王暗殺の陰謀事件に絡んで側近の

フィロタスが処刑され、その父パルメニオンも謀殺された。続けて前三二八年秋には「グラニコスの会戦」でペルシア人の将軍と一騎打ちをしていたアレクサンドロスの命を間一髪で救った幼馴染の武将クレイトスが大王自身の槍で刺殺され、前三二七年にはアリストテレスの親族で、遠征に従軍していたカリステネスもまた近習たちの大王暗殺陰謀事件に連座した廉で処刑されるなど、これまでペルシア帝国を倒すという目標達成のために一枚板であったマケドニア軍の中枢部の軋轢、もしくは亀裂が顕在化していった。

前三二九年、彼はイラン高原から中央アジアへと侵攻し、裏切り者のベッソスを捕らえて処刑したが、スピタメネス（ベッソスの側近）に扇動されたバクトリア・ソグディアナの住民が一斉蜂起、その鎮圧に二年を要している。前三二七年、彼がこの地でバクトリアの豪族の娘ロクサネと結婚したのはゲリラ戦に手を焼いたアレクサンドロスの象徴的な和解の表現であったと推定されている。

前三二七年六月、東征は再開され、翌年インダス河を渡った彼と軍団はその支流の一つヒュダスペス河でインドのポロス王と対峙する。後者は歩兵や騎兵隊・戦車隊の他、象軍を率い、ギリシア軍を圧倒したが、アレクサンドロスは嵐の夜敵軍の正面に別働隊を配置し、上流から密かに渡河した本隊がこれを打ち破るという奇襲作戦をとり、彼にとって最後の大会戦となる「ヒュダスペスの会戦」においても勝利を収めた。ついで領土権を認められ、同盟者となったポロスはインドを横断してガンジス河までの道案内を申し出、愛馬ブーケファラスの死に打ちのめされていたアレクサンドロスもようやく立ち直り、東征の続行を決意する。しかしこれまでの遠征に疲れ果て、これ以上の東方への進軍を拒否する部下たちの抵抗が強く、彼はその従軍拒否に屈し、挫折感に打ちのめされつつ帰国の途につく。なお、彼はその撤退の途上、インダス川を下る際にマッロイ族と戦い、敵の矢を受けて瀕死の重傷を負っている。

前三二五年、傷の癒えたアレクサンドロスはインダス河が海に達した地点で一行を三分し、第一軍はクラテロス（学友の一人、パルメニオンが謀殺された後その跡を継いでマケドニア全軍の次席の地位にあった）が率いて陸路を西に進み、第二軍は彼自身が率いてパキスタンからペルシアの南岸部に至る海岸沿いを、第三軍はインド洋沿岸の探検航海を命じられたネアルコス（学友の一人、

クレタ島出身で航海術に長け、マケドニアに「帰化」した武将）が率いて海路を進んだ。全軍はペルシア湾の入り口にあたるホルムズ海峡のあたりで落ち合うことが決められていたが、犠牲者を一人も出さずに目的地に辿り着いたのは第一軍のみで、第二軍は「地獄のマクラン砂漠」の横断で甚大な被害を蒙り、彼らによる水や食料の補給を受けることが出来なかった第三軍もまた苦難を余儀なくされ、ともあれ全軍がペルシアで合流できたのは「奇跡」以外のなにものでもなかった。(3)

前三二四年、彼はスーサで部下とペルシアの女性たちとの一万組集団結婚式を挙行し、自身はダレイオスの長女スタテイラとアルタクセルクセス三世の娘パリュサティスを娶り、忠実な部下であり、幼い時から常に行動を共にしてきたヘファイスティオンにもダレイオスの次女ドリュペティスを娶らせた。しかし同年秋ヘファイスティオンはエクバタナで病死し、この無二の親友の死に加えて、多忙な公務による疲労が極限に達したアレクサンドロスは過度の飲酒の末に熱病に罹り、前三二三年三十二歳で死んだ。

かくして彼は故国マケドニアに帰ることなく異国の地（バビロン）で生涯を終えたのであるが、その最期の言葉はクラティストイ、すなわち「最強のものに」であり、後継者を明確に指名するものではなかった。そのため、配下の有力な将軍たちは壮絶な後継者争いを繰り広げ、彼が征服した国々や地方は忽ち分裂し、アレクサンドロスの異母兄アリダイオス（フィリッポス三世）、愛妾バルシネが生んだヘラクレス、正妻ロクサネの生んだアレクサンドロス四世はこの争いの中で殺害された。また、母オリュンピアス、ロクサネやスタテイラ（とその妹ドリュペティス）、さらにはアレクサンドロスの唯一の同母妹クレオパトラも次々と暗殺され、彼の一族の血脈は跡形もなく消滅した。その後、ディアドコイと呼ばれた後継者たちは大王の遺産を巡って約半世紀に及ぶ戦争に突入し、最終的にプトレマイオス朝エジプト、セレウコス朝シリアが生き残るが、やがて彼らの王国は西方に台頭してきたローマ帝国に征服、吸収されて歴史から姿を消していく。(4)

一方、アレクサンドロスの名前は、当時知られていた限りの全世界にその足跡を残した偉大な軍略家・常勝不敗の将軍として、またギリシア文化とアジア文化を融合した「ヘレニズム世界」を生み出した不世出の英雄として人々を魅了し続け、忘れられることはなかった。ロー

マ帝国においてもポンペイウスをはじめ多くの将軍、皇帝、政治家、貴族たちが彼を賛美し、崇敬の対象とし、多くの著述家がその生涯を書き残した。但し、現存する代表的五篇の大王伝はいずれも死後数百年を経て完成したものであり、その結果彼の生涯は過剰なエピソードによって彩られ、様々な伝説が付け加えられ、脚色・増幅が施されるのを免れることが出来なかった。[5]

一例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アレクサンドロスの誕生以前のこととして、母オリュンピアスが婚礼前夜に雷が腹の上に落ちてきて、そこから大きな炎が燃え広がった夢を見たとか、父フィリッポスが結婚後しばらくしてから自分が妻の腹に獅子の像の彫刻で封印している夢を見た、あるいは妻の傍らに蛇が長々と横たわっているのを見て、彼女が人間以上のものと交わっていると考え、彼女との共寝を避けたという言い伝えを書き残している。そこでフィリッポスはアポロンの神殿に使いを出し、その神託を受けたところ、神アンモン（元来リビアの神であったが、ギリシア人により最高神ゼウスと同一視された）を尊崇するよう伝えられ、妻と添い寝していたのは蛇の形をしたこの神であったことを知ったという。さらに、プルタルコスはアレクサンドロスが生まれたその日に、ペルシア帝国の支配下にあったエフェソスのアルテミス神殿が炎上崩壊したことを記し、それはお産の女神でもあったアルテミスがこの英雄の出産に立ち会うためにマケドニアに駆けつけていて、留守であったためとか、この災害は後にペルシアを襲うことになる別の災害（アレクサンドロスによる征服）の前兆であったという説を伝え、彼の誕生そのものもフィリッポスのもとに戦場の勝利やその他の喜ばしい知らせと共に届けられたので、その日（現在のユリウス暦では七月二〇日）に生まれた子が将来必ずや「不敗の人」になるであろうと予告するものであったと付記している。[6]

かくして周囲の期待を一身に担って誕生したアレクサンドロスは、上述したように二十歳で王位に就くやフィリッポスが立てたアジア遠征の計画を引き継ぎ、ギリシア本土の諸都市、小アジア、エジプト・リビアを征服、取って返してペルシア帝国を滅ぼし、インドにまで進軍するのであるが、これらの遠征の途上においても幾つかの奇跡、幾つかの華々しいエピソードが伝記作家たちによって書き残されている。再び、プルタルコスから引用する。

アレクサンドロスは「グラニコスの会戦」でペルシア

軍を破った後、小アジアの諸都市を制圧しつつ南下していったが、その途上のパンフュリアでは「いつもは海から荒波が打ち寄せて、山の切り立った崖の下の方に狭い鳴り響く岩をたまに現出するだけであった」のに、この時は「海がアレクサンドロスに道を譲り」……彼らはその難所を無事に通り抜けることが出来たという、奇跡が起こっている。[7] またエジプトに入国した彼は、リビア砂漠のまっただ中を踏破してシーワ・オアシスにある神アンモンの神殿へと向かったが、その多くの困難と苦労が待ち受ける道でも幾つかの奇跡が起こり、砂漠における水不足は天からの大雨やにわか雨によって解消され、かつてカンビュセスの軍団を全滅させた砂嵐も襲わず……最も驚くべきことは彼らの一行が道に迷った時に鴉が現れて道案内をし、無事に目的地にまで先導した。このわが国においても神武天皇の建国神話に見出される奇跡は、アレクサンドロスの場合は「神から与えられた救い」であり、「父なる神からのわが子アレクサンドロスへの挨拶」であったと解釈された。[8]

なお、このような大王の神格化・伝説化は、その生存時に書かれた伝記中にもすでに記録されていたと推定されるが、彼が僅か三十二歳の若さで死ぬと、その劇的な生涯は人々の空想を刺激し、歴史上のアレクサンドロスの記録とは著しく乖離した虚構の書物が数多く書かれるようになった。それらはやがてアレクサンドロス・ロマンスと呼ばれる文学ジャンルを形成し、その中では彼を「神の子」として、もしくは叙事詩の英雄そのものとして扱うことに拍車がかかり、全くの架空物語とまではいかなくとも、それに近い小説として、荒唐無稽な動・植物や神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界に分散していった。その代表とも言うべきものは前二〇〇年頃（もしくは三世紀、二世紀から四世紀初頭に成立したとする諸説があり、今日では物語のおおまかな筋が前三世紀にすでに出来上がり、ついで様々な伝承や虚構の書簡などが累積し、三世紀に正典と呼ばれるようなテキストが固定されたと考えられている）エジプトのアレクサンドリアで成立したとされる伝（偽）カリステネスの『アレクサンドロス大王物語』や十一世紀のペルシアの詩人フィルドゥスィーの『王書』（シャー・ナーメ）であるが、本稿においてはそれらの著述及びその主人公たちが登場する以前に、もう一人のバシレウスが遥か東方に誕生していたことを論及したい。[9]

（二）

それはアレクサンドロスより約百年遅れて、分裂と闘争を繰り返していた中国の戦国時代に生まれ、七雄と呼ばれた国々（韓・魏・趙・斉・秦・楚・燕）の他の六国を滅ぼして天下を統一し、その地に最初の帝国を創建した秦の始皇帝である。但し、アレクサンドロス・ロマンスに登場する主人公がイスカンダル、ズルカルナイン（二本の角を持つ者）、セカンダルとその名前を変えながらも、明らかにマケドニアのアレクサンドロス大王の生涯―その歴史上の足跡に添った形でロマンスを展開しているのに対して、ここでとりあげる始皇帝はあくまで秦という帝国の皇帝であり、その「創業者」であり、両者を同一線上で論じることは不可能である。とはいえ、史実の、そしてアレクサンドロス・ロマンスに登場するアレクサンドロスと始皇帝との類似には目を見張るものがあるのもまた疑いようのない事実である。以下に後者の生涯を略述する。[10]

前二五九年、政すなわち後の始皇帝は趙の都の邯鄲に生まれた。父は秦の公子嬴異人（後に子楚と改名、荘襄王となる）、母は公子がまだ趙の人質であった頃、大商人の呂不韋から譲り受けた趙姫（呂不韋の愛妾）であるが、やがて秦に帰国した父が王位を継ぐと、九歳になった政は母と共に迎え入れられて太子に立てられた。また、荘襄王は二十年にも及ぶ人質としての不遇の時代に金品を惜しみなく与え、安国君（昭王の太子、後の孝文王）の正夫人華陽夫人やその姉に莫大な贈り物をして養子に推挙し、遂には秦王となる道を開いてくれた恩返しに呂不韋を相国に任命した。この段階で「奇貨おくべし」（珍しい品物だから、あとで大きな利益を生むかも知れない。手元においておこう）と宣言し、不遇の公子を援助した呂不韋の賭け・野望は見事に成就したと言えよう。

前二四六年、荘襄王が即位して僅か三年で死ぬと、政が十三歳で秦王となった。これはアレクサンドロスがフィリッポスの暗殺によって二十歳でマケドニア王となったよりも若い王の出現であり、それ故彼が実力を発揮するにはしばらくの時が必要であった。とりわけ呂不韋は荘襄王の時代と同様に重く用いられ、政の後見人となって「仲父」と呼ばれ、秦の政治の実権を掌握し、十万戸に封ぜられて文信侯と号した。一方、未亡人となった趙姫（荘襄王の夫人、政の生母、この段階で太后と呼ばれ

た）は当初呂不韋との関係を続けていたが、彼から嫪毐（ろうあい）と呼ばれる「大陰（巨大な男根）の人」を紹介されると、これを宦官と偽って後宮に引き入れ、寵愛した。しかも彼を長信侯に封じ、宮室・車馬・衣服・苑囿・狩猟など彼の欲するままに任せたので、その放縦はとどまるところがなかった。彼らの間には二人の男子が生まれている。

前二三九年（在位八年）、異母弟成蟜（長安君）が屯留で反乱を起こし、翌年には嫪毐が謀反を企て、政の失脚を図ったが、いずれも事前に発覚して失敗に終わった。

前二三七年（在位十年）、二十二歳になった政はこの二つの内乱事件を収束させたことによってようやく親政を始め、呂不韋を嫪毐の乱に関与していた廉で相国としての官を免じ、失脚させた。翌年、呂不韋は封地である河南省に退去、さらにその翌年、四川省に移ることを命じられ、毒を飲んで自殺した。一方、嫪毐と結託して政の失脚を図ったとされる太后は雍城の離宮に幽閉されていたが、後に実の母を幽閉することは「不孝」であると批判されることを恐れた政によって、咸陽の甘泉宮に戻ることを許され、前二二八年（在位十九年）にその地で没した。

前二三二年（在位十五年）頃までに、他の諸国とは較べようもないほどの軍事力を得ていた秦は「大規模な軍事活動」に着手、李斯（呂不韋の舎人であったが、後に丞相にまで昇格した楚人）の戦略に基づいて本格的に六国併合に乗り出した。

前二三〇年（在位十七年）秦の軍勢は韓を滅ぼし、前二二八年（在位十九年）趙に侵入して趙王を捕らえ（兄の趙嘉が代郡に逃れて代王と称したが）、事実上趙も滅ぼした。なお、この時邯鄲に入場した政は人質であった父を冷遇し、母子にも酷い仕打ちをした人々を全て穴埋めにしてその恨みを晴らしたと伝えられている。

前二二七年（在位二十年）、燕の太子丹が刺客荊軻を送りつけ、秦王の暗殺を謀るが失敗する。この報復として政は王翦・辛勝に命じて燕を討ち、翌年、王賁がその都の薊城を陥落させ（燕王喜は遼東に逃れたが）、宿敵とも言うべき太子丹の首をとった。さらに、前二二五年（在位二十二年）には王賁が魏を、前二二四～前二二三年にかけて王翦・蒙武が江南の楚を、前二二二年（在位二十五年）には王賁が燕・趙を完全に滅ぼし、前二二一年（在位二十六年）、最後に残っていた東の大国斉も王賁が都の臨淄を陥として斉王建を捕らえ、ここに秦は天下を統一した。

秦王として立って二十六年、ほぼ十年で敵対する六国を全て滅ぼし、中国全土を統一した政はみずからを皇帝と称し、ついで李斯のもとで、法家思想に基づく厳しい中央集権化政策の実現に着手、度量衡・貨幣・車幅など諸制度の全国的統一を図った。

前二二〇年（在位二十七年）、すなわち天下統一を果たした翌年から始皇帝の巡幸（巡狩ともいい、古来天子が天下を巡って狩猟による練兵のかたわら、地方を視察して土地の祭祀を執り行う儀式）が始まった。最初のそれは彼の先祖の故郷である西方に向かい、隴西郡・北地郡を巡るものであったが、その後の十年間に実行された四回の巡幸はすべて旧六国の領土であった東方に向かい、それらの地に天下統一の偉業を誇り、人民に彼らの生活の安定をもたらしたのは彼の恩徳であることを誇示する辞文を刻んだ石を立てている。[11]

前二一九年（在位二十八年）、第二回目の巡幸で始皇帝は山東省を目指し、その地の嶧山に登って立石。ついで山を下りた後、泰山で封禅・望祭を行い、立石。この後、彼はさらに渤海に沿って東に進み、之罘山、瑯邪山で立石、とりわけ瑯邪山の風光を愛でてその地に三月ほど休養した。この時、斉人徐福が「海中の三神山に仙人が住んでいる」ことを上書したので、始皇帝は彼に童男・童女数千人を随行させ、多額の費用を添えて東海の蓬莱・方丈・瀛州の三神山に仙人を尋ねることを命じている。これが『史記』において始皇帝が不老不死というものに関心を示した最初の記録であるが、古来中国では不老不死の霊薬、すなわち「仙丹」は渤海沖の海島に住んでいる仙人が持っているという伝説、もしくは信仰があり、第一回を除くと始皇帝の度重なる巡幸がしばしば山東省へと向かい、その海岸線に沿って行軍しているのは、彼のこの伝説への信奉・憧憬を反映するものであったことは明らかである。[12]

前二一八年（在位二十九年）、彼は再び山東省の之罘山へと向かう三度目の巡幸を挙行するが、途上の博浪沙（河南省）で暴漢に襲われ危うく命を失いかけた。しかも犯人は捕まらないまま、咸陽に帰還するという事件（『史記』「留侯世家」によれば、これは後に漢の劉邦の軍師となった張良が滅ぼされた韓の仇を晴らすために企てたものであった）が起こり、さすがにこの後しばらく巡幸は行われなかった。さらに前二一六年（在位三十一年）、咸陽の市中を微行していた時に盗人に襲われたこともあり、晩年の始皇帝は（上述した荊軻のそれを含め

て、三回にも及ぶ）殺害の危機から辛くも免れた経験からか、病的なまでに迷信深く、また極端に死を恐れるようになっていった。その結果、彼は不老不死の霊薬に対する強い執念とそれを持っていると信じられていた仙人への憧憬に突き動かされて、方士や道士といった輩の進言を入れて「仙丹」を探し求めることに熱中し、夥しい金品を浪費している。

前二一五年（在位三十二年）の第四回の巡幸では河北省の碣石山に登り、立石。この時、始皇帝は羨門・高誓（古の仙人。一説に羨門高という一人の名前とする説もあり、詳細不明）という仙人がいると聞いて燕人盧生を遣わし、また韓終・侯公・石生（一説に韓終侯の公石生という一人の名前とする説もあり、詳細不明）に命じて「仙丹」を求めさせるなど、彼の不老不死への願望はますます異常になり、同時に国民の困窮や貧困を無視する残酷さ、無慈悲さはエスカレートする一方であった。実際、この後使者として海に浮かんだ（と称する）盧生が帰り、鬼神のお告げとして「秦を滅ぼすものは胡なり」という預言書を献上すると、始皇帝は将軍蒙恬に命じて兵三十万を率いて北方の「胡」すなわち匈奴を討たせ、その翌年には従来の城牆を拡張、補強して「万里の長城」を建造した。また南方の百越と総称される蛮夷に対しても五十万の兵力を送り込んでその地を支配下においたが、このような大掛かりな軍事活動の他に、彼は咸陽に阿房宮を、驪山に始皇帝陵を造営するなどの建設工事に着手し、これらのために軍務や労役に駆り出された人々の負担は絶大であった。[13]

前二一三年（在位三十四年）、南征北伐の成功を祝って咸陽で大宴会が催されたが、その席で李斯がいわゆる「焚書」の法案を献議し、始皇帝によって裁可された。それは秦の記録でない歴史書、儒家の詩書や諸子百家の書など（医薬・卜筮・農業に関する書物を除く）を焼き払い、思想や言論を統制するものであった。翌年には、これまで始皇帝の「仙丹」に対する執着を利用して甘い汁を吸っていた侯生・盧生が懲罰をうけるのを恐れて逃亡したので、激怒した始皇帝は彼らと同属の輩を捕らえ、政府に批判的な学者たちと共に社会騒乱の罪を犯したとして「坑」の刑に処した。これが四百六十余人の「諸生」を穴埋めにしたとされる「坑儒」であり、前年の「焚書」と共に「焚書坑儒」と呼ばれ、後世彼が犯した最も極悪非道な罪状の一つとして喧伝された。

前二一一年（在位三十六年）、隕石が落下し、その石

に「始皇帝死して天下が分かれる」と刻まれていたという事件が起こり、彼は予定していた巡遊を中止した。同年の秋、始皇帝の使者が五岳の一つである華山の北を通った時、ある男から璧を渡され、「今年祖龍が死ぬ」という声が聞こえるなど、始皇帝の死期が迫っているという不吉な予言が繰り返された。

前二一〇年（在位三十七年）、始皇帝は五年ぶりに巡幸に出発、湖北省の雲夢を経て、湖南省の九疑山で虞舜（古代の聖天子・五帝の一人）を祀り、揚子江を下って会稽山に行き、大禹（夏王朝の始祖・洪水神として名高い）を祀り、立石。さらに彼は海に出て琅邪から之罘山に辿り着くが、山東省の平原津で病に倒れ、河北省の沙丘で崩御。四十九歳であった。

この後、策略家の宦官趙高と丞相李斯は始皇帝の死を隠し、その間に彼の遺言を書き直し、長男の扶蘇を自殺に追いやり、末子胡亥を二世皇帝の地位に就けた。なお、始皇帝の遺骸はその死を隠すために乗車に乾魚を積み込み、異臭を誤魔化して都の咸陽に運ばれ、陝西省臨潼県の驪山陵に埋葬された。ついで趙高は全権を掌握して二世皇帝を操り、李斯を斬腰の刑に処し、ついには胡亥にも迫って自殺させるが、その後彼が秦王として擁立した子嬰（胡亥の兄の子）に殺された。さらに子嬰も即位後僅か四十六日で劉邦（漢）の率いる反乱軍に降伏し、ついで項羽（楚）によって一族もろともに殺されたので、秦は始皇帝の死後わずか四年で崩壊、滅亡した。しかし、秦というこの短命の国家が創造した帝国のシステムは、やがて楚漢の争いを経て勝者となった劉邦に受け継がれ、西方のローマ帝国にも拮抗する漢帝国としての繁栄の時代を迎えた。

以上、始皇帝の生涯を『史記』「秦始皇本紀」を中心に見てきたが、司馬遷がこの書を編纂したのは、始皇帝の死からほぼ百年後のことである。従って、彼は先行する文献資料（『秦記』や石碑など）や始皇帝に関する民間の様々な伝説故事などを参考にしてこの書を編纂したとされるが、『秦記』はすでに失われ、しかも伝説故事に関しては彼独自のかなり自在な取捨選択をおこなったであろうことが推定されるので、この書がどこまで始皇帝の本来の姿を描出しているかは疑問である。実際、彼自身は直截的に「始皇帝を正面から暴君とは位置づけず」、その天下統一という業績をとりあえず評価しているとはいえ、記述の端々にその暴虐さや愚行の数々を記述することによって、この書が後世の人々、とりわけ儒

家的な立場の人々に始皇帝を「暴君と位置づける」資料を提供したといっても過言ではない。後者は『史記』の記述を捻じ曲げ、拡大解釈して始皇帝の悪逆非道を喧伝し、彼による学派への弾圧を強調することによって自らの立場を有利にしようとするキャンペーンを展開し、しかも自己の不老不死を切望し、愚行を繰り返すその晩年の姿を繰り返し言及したので、時代を経るにつれて始皇帝のイメージはマイナスに変貌・変質することを余儀なくされたのである。[14]

一方、アレクサンドロスの伝記もまた死後まもなく書かれたものは散逸し、ローマ帝国の時代にギリシア・ラテン語で書かれたものしか残存していないが、そこでは（漢代以降の始皇帝の評価とは対照的に）彼を不世出の英雄として崇拝し、むしろその神格化を強調する傾向が増幅したことは上述した。その結果、現存する資料から窺われるアレクサンドロスと始皇帝はまさに正反対の存在として、前者はプラスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、後者はマイナスの評価を受けて、暗闇にうごめき暴虐の限りを尽くす暗君として歴史にその姿を残すことになったのである。しかし、この二人の生涯には到底偶然の一致とは考えられない複数の類似点が見出されることに関して次章でとりあげ、ついでその相違点をも指摘しつつ、後者が前者の模倣者（エピゴーネン）であり、その末裔の一人であったということも可能なのではないかということを検証してみたい。

（三）

Ⅰ．まず二人の生まれた国（マケドニアと秦）は共に古くから栄えた由緒ある国ではなく、むしろ周辺の地域からは蛮夷の、文化果つる国として蔑視されていた。しかもアレクサンドロスの父フィリッポスはギリシアの都市国家テーベ、始皇帝の父嬴異人（後の荘襄王）は趙の都邯鄲に人質として預けられ、不遇の日々を過ごすという共通点を有している。前者は帰国後精強な軍隊を作りあげ、その領土を拡大して「軍事的、政治的優位」を獲得して初めてギリシアの諸都市から同盟国と認められたが、その「盟主」（ヘゲモン）としての地位が磐石のものではなかったことは彼の死後直ちに反乱が起こっていることからも明らかである。また、後者が帰国後に王位を継いだ秦も西方の強国として台頭したのは孝公（前三六一～前三三八年在位）の時代に商鞅の「変法」を用いてからであり、以後代々の秦王によってそのレールが受

け継がれた結果、ようやく他の東方諸国を凌ぐ一大勢力にのし上がったとはいえ、中原の国々から見れば西戎に近い新興国に他ならなかった。すなわち、アレクサンドロスと始皇帝が生まれた国、あるいは成長した環境は各々の文化の中心地からみた時に最も北もしくは西に位置する後進国であり、彼らが生まれた頃にようやくバルバロイという評価を覆すことができた「生まれたばかりの国」であった。[15]

Ⅱ. アレクサンドロスの父フィリッポスに関しては、その妻のオリュンピアスが結婚前夜に雷（ゼウス）が腹の上に落ちてきて炎となり、世界中に燃え広がる夢を見たとか、彼自身妻が蛇（同じくゼウスの化身）と寝ているのを見て共寝を避けたという類の噂があり、その結果生まれたアレクサンドロスは「神の子」であり、彼の実の息子ではないと考えられていた。同様に、始皇帝もまた名目上の父とされる荘襄王の子ではなく、呂不韋の子であったことは『史記』「呂不韋列伝」に明記されていて、両者は共にその出生（父と子の関係）に暗い影を宿している。[16]

Ⅲ. アレクサンドロスの母オリュンピアスは、異常に権勢力が強く、夫や息子に対しても干渉過多・嫉妬深い女性であったというマイナスの評価をされることが多い。例えば、フィリッポスが暗殺された時には、犯人として殺害されたパウサニアスを裏で操ったのは彼女であったという根強い噂があり、アレクサンドロスが王位に就き、マケドニアの最高責任者としてアンティパトロスを国に残して遠征に出発してからも、彼女は絶えず国事に口を挟み、悶着を起こしている。にもかかわらず、アレクサンドロスは生涯彼女を愛し、親密な関係を維持したことは、戦場にあっても頻繁に手紙のやり取りをし、戦利品の大部分を贈り続けたことで明らかである。[17] 一方、始皇帝の母趙姫は淫乱な女性として名高く、上述したように荘襄王の死後も呂不韋と関係を続け、ついで嫪毐という精力絶倫の男性を寵愛して二人の子供までもうけたことが知られている。しかも嫪毐が秦王政の排斥を謀り、これを暗殺する計画を建てた時にも協力関係にあったと思われるが、政はこの謀反が失敗に終わった後も彼女を雍城に捕らえるにとどめ、次いで（斉人茅焦の諫言を受け入れるという形をとり）都咸陽の甘泉宮に迎え入れている。すなわち、アレクサンドロスも始皇帝もそのマイナス評価されることの多い、「悪女」として名高い母に対して寛容であり、生涯その保護者であり続けたというこ

とが出来よう。

Ⅳ．アレクサンドロスは二十歳、始皇帝は十三歳で即位しているが、その若すぎる即位に関しては、前者はパルメニオンやアンティパトロスという父の時代からの重臣たちの支持が大きな役割を果たし、彼の王位継承を確実なものとしたこと、後者の場合も相国であり、実の父であったとされる呂不韋の根回しが完全であり、その引き立てによるものであったことは疑う余地がない。にもかかわらず、後にアレクサンドロスはパルメニオンを息子（フィロタス）の反逆にことよせて殺害し、始皇帝もまた嫪毐の謀反に関与したとして呂不韋を死に追いやっている。すなわち、アレクサンドロスも始皇帝も彼らの最高の支持者であり、あるいはその援助があって初めて王位に就き、偉業を成し遂げることが出来たともいえるパルメニオンと呂不韋を殺害している。[18]

Ⅴ．アレクサンドロスには複数の妻（や愛人）と彼女たちが生んだ子供がいたことが判明しているが、そのいずれかを子孫後継者として指名したという記録はなく、彼は女性に対して（親友のヘファイスティオンに抱いたような）強い執着を持たなかったようである。臨終を迎えた彼が誰に王国を継がせるのか尋ねた友人たちに遺した言葉は「最強のものに」というものであり、しかも彼の死後アレクサンドロスの一族は全て殺害され、彼が生涯をかけて建国した帝国はその部将たちによって分断され、彼の子孫が受け継ぐことはなかった。始皇帝の場合はより徹底していて、彼がいかなる后（本妻）や姫妾を持ち、彼らとの間にいかなる子孫をもうけたかという記録は皆無であり、二十数人いたとされる子孫のうち名前が判明しているのは長男の扶蘇と末子胡亥、孫の子嬰だけである。しかも始皇帝も後嗣となる太子を正式には決めないうちに亡くなり、ついで子孫も一人残らず殺害されているので、アレクサンドロスも始皇帝もその帝国を子孫（血族）に遺産として残すことのない、実質的には一代限りの帝王であった。

Ⅵ．アレクサンドロスはギリシアの諸都市を支配下に置いた後、西はエジプト・リビアから東はペルシア、中央アジアを越えて、インドに及ぶ広大な領土を征服し、当時知られていた全世界とも言うべき地域に東西文明の融合を図る大帝国を建国した。一方、始皇帝も東周（前七七〇～前二五六年）の衰退後、分裂して抗争を繰り返していた諸国、すなわち戦国七雄の他の六国を全て征服し、統一したその一帯に中国で初めての帝国を建国して

いる。この全世界・天下の統一という事業が両者の最大の業績であったことはいうまでもないが、アレクサンドロスと始皇帝の建国した帝国は、彼らの死後まもなく崩壊への道を辿り、やがてより巨大なローマ帝国、漢帝国へと吸収・合併されていった。[19]

Ⅶ. アレクサンドロスはエジプトに滞在していた時に、ナイル川の河口に彼自身の名前を冠した都市アレクサンドリアを建設、その後も征服した国、もしくは地方にアレクサンドリアという多くの都市を建設し続けたことが知られている。それらの都市は軍事的拠点であると同時に、彼と彼の軍隊が全世界にその足跡を刻んだという栄光の記念碑でもあった。同様に、始皇帝も征服し滅ぼした国々を巡幸する際に、各地に石を立て、それに自らの業績を誇示する告辞を刻んだことは上述したが、その他にも滅ぼした国々のものに模した宮殿を咸陽に建て、その総数は関中で三百、関中外には四百にものぼったと伝えられている。従って、アレクサンドロスも始皇帝も極めて自己顕示欲の強い大造営家・建築家であったということが可能である。[20]

Ⅷ. アレクサンドロスは、その遠征の途上において幾度も瀕死の重傷を負い、彼が死んだという噂は絶えず流されたにもかかわらず、現実には彼の死は過度の飲酒によって衰弱していた体を襲ったマラリアによる「病死」であったとするのが定説である。一方、始皇帝は『史記』に記録されているだけでも三回の暗殺や殺害事件に遭遇し、いずれの場合も危機一髪であったことが明記されているが、彼の死もまた五回目の巡幸の途上における普通の「病死」であった。この他、前二二三年の春バビロンに入る頃からアレクサンドロスの周辺には様々な不吉な現象が起こり、彼自身それらの不思議な出来事や異常なものを「霊妙な前兆」と考えて、心をかき乱され恐怖を抱くようになったことをプルタルコスが伝えているが、始皇帝も上述したようにその晩年に彼の死を予告する様々な予兆・予告があったことを『史記』が記録している。しかもアレクサンドロスの死後、その亡骸はバビロンで防腐処理が施され、豪華な霊柩車が二年もかけて造られ、マケドニアの古都アイガイに運ばれる予定であったが、側近の一人プトレマイオスがこれを奪い、遠いエジプトのアレクサンドリアに運び埋葬したとされ、[21]始皇帝の場合も上述したように李斯らが咸陽に戻るまでその死を隠蔽したために死体が腐臭を放ち、それを誤魔化すために乾魚を一杯積み込んだというエピソードが『史

記』に残されている。従って、彼らの死に関してはアレクサンドロスも始皇帝もおよそ英雄に相応しくない「病死」であること、[22]しかもその死は様々な形で予告され、避けがたい運命として彼らを襲ったこと、そして死後その埋葬までにかなりの時間を要したという共通点が見出される。

以上、八項目を立てて両者の類似点をとりあげてきが、彼らには決定的な相違点があることもまた事実である。最も顕著な相違点は、その全世界・天下の統一という大事業において、アレクサンドロスは自らが先頭に立って戦い、その天才的ともいえる軍事力・戦略で勝利を収めているのに対して、始皇帝の場合には決して自らが戦闘に参加することはなく、優秀な将軍たち（王翦、王賁、蒙恬ら）を駆使することによって勝利者となり、安全が獲得されて始めて征服した国々に足を踏み入れていることである。もう一つの相違点は、不死の探求というテーマがアレクサンドロスには皆無であり、彼の遠征は恐らく世界の果てまで見極めたいという夢の実現のためであったのに対し、始皇帝の巡幸は仙人に憧憬し、彼らが持っているとされる「仙丹」を得ることであったという点に認められる。彼らの死はそれまでに繰り返された戦いの最中における怪我や事故、もしくは暗殺といった英雄に相応しい劇的なものではなく、あくまでも「病死」であり、埋葬するまでにかなりの日時を要した点でも類似していることは上述したが、アレクサンドロスが病に倒れてもなお「まだ見ぬ国」への遠征を語っていたのとは対照的に、[23]始皇帝の場合はその最晩年においても方士らの言葉に惑わされて大魚の姿をしているという「海神」を追い求め、これを射殺するといった愚行を繰り返している。[24]後者にとっては、名声よりも自らの不老不死が何よりも望ましく、いかなる犠牲を払ってもなお追い求めずにはいられない希望であり、妄執であったといえよう。もう一つの相違点は、アレクサンドロスの場合にしばしば見出される奇跡、神々の援護や幸運の瑞兆は始皇帝には記録がなく、むしろ予兆・予言はその晩年における凶兆に集中していることである。従って、史実のアレクサンドロスと『史記』「秦始皇本紀」の始皇帝は、前者はプラスの、後者はマイナスの存在としての印象を人々に与え続けるのであるが、それにしても両者の類似はその誕生から家族関係、若すぎる即位、ほぼ十年間で成し遂げた全世界・天下の統一という偉業、その偉業を誇り、宣伝するための大建築・土木工事、死を予告する凶兆と

その実現等々、到底偶然とは言いがたいのである。

（四）

このような類似は、秦の始皇帝がマケドニアのアレクサンドロスの模倣者であったことに由来すると私自身は考えている。恐らく、戦国時代の末、始皇帝が生まれた頃には既にアレクサンドロスの存在やその偉業の数々は中国、とりわけその最西端に位置して秦には伝えられていたと思われ、その結果始皇帝をこの不世出の英雄になぞらえることになる幾つかの可能性があったに違いないのである。例えば、始皇帝の実の父とされる呂不韋が息子をこの英雄の相似形として成長することを期待したのではないか。当時の中国において大賈（各都市に店舗を持ち、各国の物産を広く取り扱っていた商売人）であった彼は、シルクロードを通ってやってくる隊商（キャラバン）の人々からアレクサンドロスの生涯やその華々しい業績を聞くことによって、両者に幾つかの共通点を発見し、始皇帝をその後継者にしようとしたのかも知れない。もしくは、始皇帝その人がアレクサンドロスの生涯やその業績を聞き及び、彼の末裔であろうと意図したかも知れず、あるいは彼のブレーンの誰かが両者を類似させることを思いつき、『秦記』に書き残した結果であったかも知れない。いずれにしても、『秦記』の作者は、始皇帝をアレクサンドロスに酷似した存在、西と東に誕生した双子のように描いたのではないかと思われるのであるが、やがて百年を経て漢帝国に誕生した『史記』の作者の司馬遷は、両者を比較し、その類似に驚愕しながらも、記録を改変、光と影のような二人の存在にしたのではなかったか？　彼は呂不韋、始皇帝、もしくは始皇帝のブレーンの意図を消去することに専念し、今日私たちが目にするような『史記』の始皇帝像を創りあげたのではなかったか？　しかし、彼の努力にもかかわらず、始皇帝はアレクサンドロスの模倣者であり、その末裔の一人であり続けたことは、さらに彼の死後に創作されたアレクサンドロス・ロマンスの主人公たちが、アレクサンドロスばかりでなく、始皇帝の業績をその内容に取り込み、新しいアレクサンドロス像を描出していることからも明らかである。[25]

註

（1）バシレウスという語は、アケメネス朝の王の称号をギリシア語で表したもので、元は「王」を意味するものであったが、次第に「皇帝」すなわち「諸王の王」（*ba-*

sileus basileon）という用語へと転用された。本稿においてはこの語をマケドニアのアレクサンドロス三世を指すものとして用い、彼が歴史に刻んだ業績やその伝承の影響を受け、あるいは模倣した人々をその末裔として捉えている。

（2）松村一男①「アレクサンドロス」『世界の神話　英雄事典』河出書房新社、二〇一九年、五四～五六頁、奥西峻介「セカンダル」同二〇〇～二〇一頁の他、森谷公俊①『アレクサンドロス大王』講談社、二〇〇〇年、ロビン・レイン・フォックス著、森夏樹訳『アレクサンドロス大王』上・下巻、青土社、二〇〇一年など参照。Cf. W. W. Tarn, *Alexander the Great*, Beacon Press, Boston, 1956. N. G. L. Hammond, *Alexander the Great: King, Commander and Statesman*, Noyes Press, New Jersey, 1980.

（3）マイケル・ウッド著、吉野美耶子訳『大遠征　アレキサンダーの野望―ギリシャからアジアへの旅―』ニュートンプレス、二〇〇〇年、二〇六～二一三頁参照。

（4）アレクサンドロスの帝国から五つの王国と六人の王が出現した。すなわちアンティゴノスと息子のデメトリオスは東地中海からペルシア東部に及ぶ広大な領域を、プトレマイオスはエジプトを、セレウコスは東方諸属州を、リュシマコスはトラキアを、カッサンドロス（アンティパトロスの長男）はマケドニアを支配下に置き、それぞれ王国を建てた。しかし、アンティゴノスとデメトリオスの王国は実質二十年の短命に終り、リュシマコスとカッサンドロスの王国はいずれも複数の息子たちの後継者争いや陰謀で王権が混乱した上、前二八〇年に始まるケルト人の侵入に耐えられず、国家そのものが消滅した。従って、ローマ時代まで存続したのはプトレマイオスとセレウコスの王国であったが、前者はローマのオクタヴィアヌスに、後者はポンペイウスに滅ぼされた。森谷公俊②『アレクサンドロスの征服と神話』講談社、二〇〇七年、二八二～二九八頁参照。

（5）大王伝に関しては、アレクサンドロスの同時代の人々、すなわち側近の一人プトレマイオス、歴史家カリステネス、技術者・建築家アリストブロス、哲学者オネシクリトス、大王の学友ネアルコスの他、やや時代が下ってプトレマイオス朝エジプトで活躍した作家クレイタルコスなど六人の著述が知られているが、彼らの原典は失われて現在は断片を残すのみである。今日、現存する大王伝は（これらの原典に依拠しつつ）ローマ時代に書かれた五篇、すなわちディオドロス、プルタルコス、クルティウス・ルフス、ユスティヌス、アリアノスらの著述である。なお、これらの五篇の著者の中で一番古いディオドロスでも大王の死から三百年、アリアノスに至っては五百年近くの歳月が経過していて、ローマ帝国の政治的・知的環境下にあって彼を美化する傾向は増幅する一方であった。例えば、前者は「この王の……功業の大きさは、太古の時代から記憶によって伝えられているすべての王を凌駕した。というのも、彼は十二年でヨーロッパの少なからぬ部分とアジアの大半を征服し、古の英雄や半神

たちに匹敵する赫々たる名声を手に入れた」と述べ、後者も「思うに当時、人類のいかなる種族、いかなる都市、いかなる人物であれ、およそアレクサンドロスの名が届かなかった場所はなく、その名を聞かなかった者もいなかった。実際、かくも比類なき人は、神なくしてこの世に現れるものではないと私には思われる」という過激な賛辞を呈している。森谷②、二六～二六頁参照。

（6）村川堅太郎編『プルタルコス英雄伝』中巻、筑摩書房、一九八七年、八～一〇頁参照。この他、少年時代のエピソードとして、彼は誰も乗りこなすことの出来なかった荒馬ブーケファラスを見事に調教したことがあげられ（同上、一三～一四頁）、後にこの馬は人を食う馬であっとか、この馬を乗りこなした者が「世界の王」となるという予言があったと神話化・伝説化された。

（7）同上、二八頁。この種の奇跡は『旧約聖書』「出エジプト記」ではモーゼがエジプトから逃れ出て紅海を渡る際に、海が二つに分かれて道が出現し、イスラエルの人々だけが渡ることが出来、追ってきたエジプト人は海の中に投げ込まれた、また朝鮮神話では新天地を求めて旅だった高句麗の始祖朱蒙が、行く手を大河に遮られた時、水面を叩くと魚鼈が並び橋となって彼の一行を渡してくれたが、追っ手はすべて溺死したと語られるなど、英雄叙事詩にしばしば見出される「大河（海）渡渉」のテーマの一つである。

（8）同上、四一～四二頁。ここでアレクサンドロスは自分が神アンモン＝ゼウスの子であるという確証を得たとされる。なお砂漠における水や食料不足が解消される奇跡に関しては、上述したモーゼにも出エジプト以後に類似の現象が起こり、鴉による道案内というエピソードは、神武天皇の東征の途上、『古事記』では高木大神の命を受け、『日本書紀』ではアマテラスに派遣されたヤタガラスが彼を目的地へと先導した事例が見出される。

（9）アレクサンドロス・ロマンスに関しては、松村①、五五～五六頁、山中由里子『アレクサンドロス変相』名古屋大学出版会、二〇〇九年、一九頁以下、及び巻末二三頁の付録「偽カッリステネスのアレクサンドロス物語」諸系統の図版の他、田名部昭『アレクサンドロス大王』光文社、一九九八年、二五、一八二～一八五頁など参照。Cf. E. A. Wallis Budge, *The History of Alexander the Great: Being the Syriac Version of the Pseudo-Callisthenes*, Cambridge University Press, Cambridge, 1889. Richard Stoneman, Kyle Erickson, and Ian Netton (ed.), *The Alexander Romance in Persia and the East*, Barkhuis, Groningen, 2012. なお、最後にあげた参考文献では、アレクサンドロス・ロマンスの分布地域はトルコ、インド、ペルシア、アラビア、イスラエル等々に及び、それぞれの地域でそれぞれの変貌・変容を遂げた物語が生まれ、語り伝えられたことが論及されているが、山中由里子（同書、二六三頁）は「（この物語はエジプトのアレクサンドリアを源泉とし、アルメニア語版、ギリシア語版、シリア語版、アラビア語版、ペルシア語版などを経て）東方のモンゴルや中央アジア、マレー半島にもその痕跡

が認められる。にもかかわらず、中国には彼の全生涯を描いた偽カッリステネスのアレクサンドロス・ロマンス、その中国版は今日まで発見されていない」と指摘する。本稿においては、このような氏の指摘に対する反論として、秦の始皇帝の生涯をとりあげ、彼もまたアレクサンドロスの模倣者、もしくはその末裔の一人だったのではないかという仮説を提示するものである。

（10）野口定男・近藤光男・頼惟勤・吉田光邦『史記』（上・中・下）平凡社、一九七二年の他、小倉芳彦『古代中国に生きる』三省堂、一九八〇年、三〇頁以下、鶴間和幸①『秦の始皇帝―伝説と史実のはざま』吉川弘文館、二〇〇一年、藤田勝久『史記秦漢史の研究』汲古書院、二〇一五年など参照。

（11）いわゆる始皇帝の刻石は嶧山、泰山、瑯邪台、之罘山、東観、碣石門、会稽山の七地に建てられたが、いずれも山上や海岸に近い場所が選ばれ、始皇帝が自らの功業を地の果てまで広く示そうとする意思が窺える。なお、現存するのは泰山と瑯邪台の二石であるが、いずれも風化して文字は殆ど判読できない。松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武史編『中国史』I、山川出版、二〇〇三年、三四二頁参照。

（12）桐本東太「不死の探求―始皇帝巡狩の一側面」『中国古代史研究』第六、一九八九年（のち『中国古代の民俗と文化』刀水書房、二〇〇四年書所収）、中野美代子『龍の住むランドスケープ』福武書店、一九九一年、二〇～二五頁、大形徹『不老不死―仙人の誕生と神仙術』講談社、一九九二年（同タイトルで志学社より、二〇二一年再版）など参照。

（13）実際、『史記』「淮南列伝」は将軍伍被の言葉として「かつて始皇帝は将軍の蒙恬を派遣して北方の匈奴を攻撃させ、東西数千里の長城を築かせたが、そのため軍兵を風雨に晒すこと常に数十万にのぼり、死者は到底数え切れず、倒れ伏す屍は千里も続き……百姓力つく」と記し、さらに「秦は無道を行って天下を痛めつけ、処々に行幸し、阿房宮をつくり、重税を取立て……その政治は苛酷、刑罰は峻烈で、天下はいりたてられて焦げ付くようであった」と評している。

（14）鶴間和幸編著②『悪の歴史』東アジア編、上、清水書院、二〇一七年、八四頁。例えば、「焚書」はその法案によって地上における全ての書物が焼き払われたかのように曲解され、また「坑儒」の実態はむしろ妖言を用いて人々を惑わす方術の輩（方士や道士）を排外することを目的としていたにもかかわらず、「諸生賢儒」が埋められたかの如く粉飾された。「万里の長城」の建造についても、その実態や有益性は無視され、漢代以降になるとひたすらに始皇帝の極悪非道な罪状として取り上げられることに拍車がかかり、後には孟姜女の悲劇を語る伝説すら生むに至るのである。

（15）実際、マケドニアは長い間、ギリシア人の祭典であるオリンピック競技会に「外国人」であるとして参加することが出来ず、また『史記』「范雎列伝」では昭王自らが自国を「僻遠の国」と称している。森谷②、六一頁以下、

松丸、三三四頁など参照。

(16) にもかかわらず、彼らは太子としての地位をすんなりと獲得しているので、この父親が不明というエピソードは英雄叙事詩によく見られる一要素であり、多くの英雄はその父親が不明、もしくは天から降り注ぐ光のような存在であり、アレクサンドロスも始皇帝もこれらの神話・英雄叙事詩のバリエーションとしての一面をとどめていただけかも知れない。松村一男②「英雄たちの生涯」『世界の歴史』七、朝日新聞社、一九八九年、五八～五九頁参照。

(17) 実際、フィリッポスとの夫婦関係は冷え切っていて、オリュンピアスは前者が娶った若い妻が男の子を生んだときにはアレクサンドロスの後継者としての地位も危ぶまれる状態にあったので、後にこの幼児を絞殺、またアレクサンドロスの後継者争いの際にはその異母兄アリダイオス（フィリッポス三世）を暗殺するなど、その行為には非難されるべき点が多々あったことも事実である。田名部、一二四～一二五、一七六頁以下、森谷公俊③『王妃オリュンピアス―アレクサンドロス大王の母』筑摩書房、一九九八年など参照。

(18) 但し、この忘恩ともいえる行為は両者の冷酷な性格をうかがわせるものであると同時に、マケドニアにおけるパルメニオンの、秦における呂不韋の権勢がいかに強大であり、その王権を脅かすものであったかを推定させるに充分である。

(19) 彼らの帝国はより大きな、より永続する大帝国の先駆者として、束の間の光芒を放って消滅する流星のようであったといえよう。パーサ・ボース著、鈴木主税・東郷えりか訳『アレクサンドロス大王』集英社、二〇〇四年、三六九～三七二頁。

(20) プルタルコスによれば、遠征中の大王が各地に建設した都市アレクサンドリアは七十以上もあったとされ、彼はこの他にも愛馬ブーケファラスや愛犬ペリタスが死んだ際にその名前を冠した町を建てたことが伝えられている。一方、始皇帝は以下のような壮大な諸事業、すなわち馳道と呼ばれる皇帝専用の幹線道路、万里の長城、豪華を極めた阿房宮、巨大な陵墓（驪山陵）のような建造物の造営にも着手し、多くの人民を動員したことが知られていて、彼の死後「人民の反発を買う最大の原因となった」。森谷①、一三八～一四〇頁、同②、三一〇頁以下、松丸、三四五～三四六頁など参照。

(21) 森谷②、二七七頁、ピエール・ブリアン著、桜井万里子監修『アレクサンダー大王―未完の世界帝国』創元社、一九九一年、一三〇頁など参照。

(22) 松村②、五八～五九頁によれば、英雄の生涯パターンは一定の要素から成り立っていて、その誕生、成長、武勲、死などに不思議な類似が認められるが、最後にあげた死に関しては「英雄のそれは寿命を全うした自然死ではなく、劇的な死である」ことが指摘されている。にもかかわらず、アレクサンドロスと始皇帝の場合には明らかにこの要素が欠落している。

(23) 実際、アレクサンドロスはその最後の日々を過ごした

バビロンにおいて、病床にありながらアラビア半島を周航して紅海を通り、シナイ半島に達するという大規模な探検航海や西地中海をジブラルタル海峡まで進むという新しい遠征計画すら立てていたが、前三二三年六月一〇日「尽きることのない征服欲に駆られ新たな遠征への出発を目前にしながら、突然の熱病に冒されて世を去った」と伝えられている。森谷①、二五二頁、同②、三四五～三四六頁。

(24)　海神について、『史記』は徐福たちが「仙丹」を入手できないのは大鮫魚が現れるためであるとして、これを弩でしとめるよう進言し、たまたま始皇帝も海神と戦った夢を見たところから、海に浮かぶものたちに巨魚（海神は目で見ることはできず、大魚・蛟竜の姿をしている）を捕らえるよう命じ、自身も連発の弩を持って海に沿って北上し、之罘山で大魚を射殺したことを記している。皮肉なことに、彼はこの直後に「病死」している。

(25)　この点に関しては、次稿「バシレウスの末裔――アレクサンドロス・ロマンスの主人公たち――」（東北大学・山田仁史追悼論文集『神話研究の最先端』笠間書房、二〇二二年所収）において論究する。

謝辞

アレクサンドロスの参考文献に関しては、大阪大学名誉教授の奥西峻介先生に多大のご教示・ご学恩を頂いた。ここに心からのお礼を申し上げたい。